

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	小谷 勇人	学校名	埼玉県春日部市立武里中学校
教科(科目)・領域	社会科(地理的分野)	対象学年(人数)	1年1組(40名)
実践年月日もしくは期間(時数)	令和7年11月中旬 ～ 11月下旬(5時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 第2編 世界のさまざまな地域 第2章 世界の諸地域 小単元名 北アメリカ州					
2. 実践する教科・領域: 社会科	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 小単元の目標(評価規準を意識して設定)					
ア 北アメリカ州に暮らす人々の生活を基に、州の地域的特色を大観し、理解させる。 【知識・技能】					
イ 北アメリカ州において、地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目させて、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察、表現させる。 【思考・判断・表現】					
ウ 北アメリカ州について、「移民と経済」の視点を生かし、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究させる。 【主体的に学習に取り組む態度】					
5. 小単元の評価規準	①知識・技能	①大陸と島々からなる多様な自然、移民によって持ち込まれ育まれた文化、世界に影響を与える巨大な経済力などの特色を概観し、理解している。 ②北アメリカ州の国では、移民が経済の発展に重要な役割を果たしてきたことを理解している。			
	②思考・判断・表現	①北アメリカ州の国が多様な農産物を大量に生産できる理由を、気候、生産方式、農場経営の仕方などの特色から説明している。 ②アメリカ・カナダの五大湖沿岸、アメリカのサンベルトの工業地域について、主な工業の種類とそれが発展した理由を比べて、図表などに適切にまとめている。			
	③主体的に学習に取り組む態度	①北アメリカ州を概観して設定した単元を貫く課題の回答を予測し、見通しをもって主体的に追究しようとしている。 ②自らの学習を振り返りながら、粘り強く考察することを通して主体的に単元を貫く課題を追究し、社会に関わろうという態度を示している。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
本小単元では、空間的相互作用や地域などに着目して、「北アメリカ州」が世界の中で最も経済力を持つに至った産業の実態を捉えるとともに、その産業の発展に大きく関わった移民の姿についての主題を追究したり解決したりすることをねらいとする。					
北アメリカ州には多くの移民が見られる。広大な国土を活用した農業や、豊富な鉱産資源を利用した工業が発展し、移民たちはこうした産業で働いてきた歴史がある。現在も北アメリカ州には豊かさを求めて世界各地から多くの移民がやってきており、北アメリカ州の学習には「移民と経済」という視点は切っても切れない関連性があるものと考えている。その際、現在まで移民が土着する過程における移民の痛み・葛藤について授業で触れることで生徒に社会正義の実現の視点の芽生えが出てくるのではないかと考えている。本実践においては、カナダの日系移民の痛み・葛藤を想起させる授業展開を取り入れることでその芽生えにつなげたい。					

【生徒観】

本校は埼玉県東部に位置し、東京都から長距離の私鉄線が伸びていることによりベッドタウンとなっている。また、地域には大規模な公営団地、学区内には関東地方では最古の民間レベルのモスクがあるなど近年急速に外国人・外国にルーツをもつ人々が居住する地域に変化している地域に位置する学校となっている。このような国際色豊かな環境にもかかわらず、校内ではマジョリティである日本人の文化や生活様式にマイノリティの外国人・外国にルーツをもつ生徒は合わせる同化傾向になっていることは否めない。このようなマイノリティとなる生徒をエンパワーメントするために「移民」の視点をもつ授業の役割は大きいと考える。かつては日本も移民送り出し国であったという生徒にとって意外な事実、現在地域に居住する移民受け入れ国となっている日本を見つめ直す機会にもなり、さらに外国人・外国にルーツをもつ生徒にとっては自尊感情を高める効果が期待されるものと考えている。

【教材観】

本単元にあたる世界の諸地域の単元を「移民」の視点で貫いて学習する。「移民」の視点を取り入れる際に、より効果をもつ単元配列がどのようなものであるかを追究したい。仮説として、それぞれの州における「移民」の状況をストーリー性のある配列で学ばせることを考えた。その理由に、国際理解教育の知見を生かし、人の生き方や痛み・葛藤までを考える視点を取り入れることがある。現在の構想は、①オセアニア州「移民の変化による他地域との結びつき」⇒②ヨーロッパ州「移民の増加と統合する未来」⇒③アフリカ州「移民の歴史と成長の可能性」⇒④北アメリカ州「移民と経済」⇒⑤南アメリカ州「移民による開発と環境への課題」⇒⑥アジア州「多様な民族と経済成長」の順序の履修とした。なお、移民を学習の軸として取扱う際に意識したい問いとして、①「彼らの市民意識はどこにあったのか？」②「なぜ彼らは、そのコミュニティ(地域)で生きていくことを選択したのか？」という本質的な問いをそれぞれの州の学習の要所で投げかけることによって、文字通り「社会を生きる市民の育成」を掲げる社会科の学びになると考える。

小単元にあたる「北アメリカ州」の学習は、人種・民族の分布、産業立地(主に農業・工業)に着目し、多面的・多角的に考察することを通して北アメリカ州の地域的特色を理解させることを目指す構成とする。具体的には北アメリカ州が地域によって人種・民族、産業に様々なちがいが見られる理由(背景を含む)を歴史、地理、政治、経済、自然、社会的要因などと関連付けて理解させる。その中で、日系移民に注目することで「移民」という現象がグローバル化に伴って世界中で当たり前になっている現象であって、日本も例外ではなく、さらに私たちの身の回りにも「移民」が存在していることをつかませたい。

【指導観】

本小単元の指導にあたっては、北アメリカ州の産業、とりわけ農業と工業が高い国際競争力をもっている要因を、「自然環境」「鉱産資源」「交通網の整備・発達」「産業の効率化」「移民」などの視点から理解させる工夫が求められる。農業や工業の発展に関する様々な情報を収集し、分類したり、統合したりすることを通して、それぞれの産業の特徴を見いださせる。具体的には、グループごとに仮説を立て、情報収集を行い、関連する情報を読み取り、整理することを通して、北アメリカ州の産業(とりわけ農業と工業)の発展が北アメリカ州の自然環境、鉱産資源、産業の効率化、移民の受け入れなどと、どのように関連しているのかを多面的・多角的に考察させる。そして、集めた情報をもとに、自分たちなりに北アメリカ州の産業の発展要因を結論付ける活動を行う。このような活動を単元の1次で行った上で、「移民」の視点に着目し、単元の2次での学習を展開していく。2次では、北アメリカ州の移民の分布の特徴やその特徴によって生まれるハイブリッドな文化の豊かさに気づかせる。また、カナダの日系移民が現地でも果たした役割を理解するとともに、自身のルーツにつながる文化を継承することの重要性に気づかせる機会をつくってきたい。

7. 単元計画(全5時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1	【北アメリカ州の自然環境と移民】 ○北アメリカ州の自然環境の特色や移民の特徴について理解する。	・主題図をもとに北アメリカ州の自然環境や人種・民族構成の特色を読み取り、読み取った特色をもとに探究する学習課題を発見する。	・写真「ロッキー山脈の山々」 ・地図「北アメリカの自然、降水量」 ・雨温図「ハバナ、ニューヨーク、モントリオール」 ・グラフ「移民の出身州別人口の変化(アメリカ合衆国・カナダ)」
	<単元の学習課題>北アメリカ州に多く見られる移民は、地域にどのような影響を与えているのか。		



10
— 小谷 勇人

春日部市立武里中学校・1年・社会

2	<p>【北アメリカ州の産業の様子】 ○北アメリカ州の農牧業の特色や、移民が農牧業にどのように関わっているのかについて理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・農業の分布図をもとにアメリカ合衆国の中西部で大豆やトウモロコシが大量に生産されているのは、自然環境が適しており、広い土地を生かし、企業的な農業によって展開されていることを追究する。また、そこで働くヒスパニックやアジア系の移民の存在を読み取る。 ・カナダ西部でインド移民が農場に集団で働いている話から安価な労働力として働く移民の姿を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真「センターピボットとよばれる大規模なかんがい農業」 ・地図「アメリカ合衆国・カナダの農業」 ・動画「アメリカ合衆国の農業」 ・写真「メキシコ系の労働者によるレタスの収穫」
3	<p>○北アメリカ州の工業の特色や、移民が工業にどのように関わっているのかについて理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北アメリカ州の鉱工業の傾向および主要な工業地帯から、それぞれの工業地帯の特徴を調べる。 ・シリコンバレーの住民構成から近年はアジア系の割合が増えていることを読み取る。 ・ICT産業が急速に発展する現代において、アジア系の移民が果たしている役割を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフ「アメリカ合衆国の工業生産額の工業生産額の地域別割合の変化」 ・地図「アメリカ合衆国・カナダの鉱工業」 ・動画「アメリカ合衆国の工業」 ・コラム「アジア系の社員として働く」
4	<p>【北アメリカ州の経済を支える移民と生活文化】 ○北アメリカ州の移民の分布の様子や、移民が地域に与える文化的影響について理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・州別に見たアメリカ合衆国の人口構成の地図からアフリカ系、アジア系、ヒスパニックの人々の割合が高い州の分布を読み取り、その理由を説明する。 ・移民の存在によって生まれたハイブリッドな生活文化(例・ジャズ)について捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地図「州別に見たアメリカ合衆国の人口構成」 ・写真「ニューヨークにあるイタリア人街」 ・写真「ロサンゼルス日本人街」
5 本時	<p>【カナダに渡った日系移民の役割】 ○北アメリカ州を支える移民の中に日系移民がいる歴史的事実を通し、人々の移動の背景や自身のルーツにつながる文化を継承することの重要性を理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カナダのバンクーバーにあるスティーブストンという港町で明治時代以降に移住した日本人が果たした役割について資料やゲストティーチャーの話から学び、現在でも子孫が現地において日本文化を受け継ぎながら暮らしていることを追究する。 ・最後にまとめとして学習課題の回答を各自が論述する。 ・人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーの話 ・地図帳「北アメリカ州」(帝国書院) ・写真「数の子の展示物(ジョージア湾缶詰工場)」「日系漁師像」「工野庭園」「武道場」「日系移民センター」 ・資料3「カナダに渡った日本人の「活躍」と「正義」(『海外移住資料館 学習活動の手引き』)」

8. 本時の展開(概略)			
本時のねらい: 北アメリカ州を支える移民の中に日系移民がいる歴史的事実を通し、人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性を理解する。			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	<p>1 カナダに渡った日本人の存在を知る T「突然ですが、日本のおせち料理の具材をイメージしてください。何を最初にイメージしますか。」 S「黒豆」「栗きんとん」「昆布巻き」「数の子」</p> <p>T「実は数の子は95%が輸入に頼っています。果たしてどこからやってきているのでしょうか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な食文化に関する話題から授業を開始することで興味・関心を高めさせる。 ・ニシンの産卵場所が現在学んでいる北アメリカ州に多いことを補足する。 	<p>写真「おせち料理」</p> <p>地図「ニシン漁場」</p>

	<p>S「中国」「ベトナム」「フィリピン」「アメリカ」</p> <p>T「正解はアメリカ・カナダ・ロシアです。中でもカナダ太平洋側のバンクーバーという都市が有名です。地図帳で場所を確認してみましょう。」</p>	<p>・地図帳でバンクーバーと日本の横浜が海路でのつながりが深くなっていることを確認させる。</p> 	<p>地図帳「北アメリカ州」(帝国書院) 写真「数の子の展示物(ジョージア湾缶詰工場)」</p>
<p>展開 (30分)</p>	<p>2 カナダに渡った日本人の役割を知る T「今日はゲストとしてカナダの日系移民を研究している大学の先生にバンクーバーに渡った日本人がいたことについて話してもらいます。(授業日の都合がつかない場合は事前に収録した動画を流す)」 10分</p> <p>T「カナダに渡った日系移民の話聞き、疑問に感じたことを簡単に書きだそう。その後、周りの人と話し合い、自信のある質問にして全体の場で発表しましょう。」</p> <p><実際の質問></p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ日本から遠いカナダに移住しようと思ったのか。 ・カナダにやってきた日本人をカナダ人はどのように思っていたのか。 ・当時の日系移民はどのように暮らしていたのか。 	<p>・考える時間を少し与えることで展開にスムーズにつながる。</p> 	<p>写真「日系漁師像」</p> <p>資料3「カナダに渡った日本人の「活躍」と「正義」(『海外移住資料館 学習活動の手引き』)」</p>
		<p>・第三者の方に授業へ関わってもらうことで興味・関心を高める効果が期待される。</p> <p><ゲストティーチャーの話のポイント></p> <ul style="list-style-type: none"> ○和歌山県出身者がカナダへ移住した事実(「アメリカ村」バス停標識) ○工野儀兵衛と三尾村について <p>・生徒の思考を促すために、ゲストティーチャーの話には正解につながる内容を含めない。</p> <p>・机間指導をしながら、各自が考えている質問に価値づけを行う。(良い気づきがある内容に赤線を引いて称賛する)</p>	

	<p style="text-align: center;">↓</p> <p>T「たくさんの素晴らしい質問が出ましたね。皆さんの質問の中で『当時の日系移民の暮らし』について取り上げます。まずは、グループに配った6つのカードを古い順番に並べてみてください。裏面は見ないで並べ替えてください。」</p> <p>T「正解は2→6→1→5→3→4の順番です。1と6は明確な時期を示せないなので、おまけで順番は気にしません。全部正解した班はありましたか。さて、気になる裏面を見てください。この後は、カードの情報をつかみながら、ワークシートの2つの問いの答えを班で話しながら考えましょう。問い①は『当時の日系移民はどのように暮らしていたのか。今はもういないのか。』、問い②『どのようにして日系人は受け入れられていったのか。また、受け入れられるまでにどのようなことがあったのか。』についてです。それでは活動を始めてください。」</p> <p>⇒活動後、数班に発表させる。</p> <p><実際の生徒の回答></p> <p>問い①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・白人に比べて低賃金・重労働であったものの現地でさまざまな仕事をしていた。 ・日本人同士で協力しあって暮らしていた。 ・日系文化センターがあるということで、日系移民が現在も現地で暮らしている。 <p>問い②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日系人は過酷な環境下であっても勤勉に働くことで次第に現地に受け入れられていった。 ・高い造船技術が現地で高く評価される日本人がいたことから現地で日本人コミュニティができて認められていくことにもつながった。 ・受け入れられる中で白人の日本人排斥運動や差別・偏見がある過酷な環境であった。 <p>T「他にもカナダに移住した日本人は製材所での運搬、森林の伐採業や鉱業などの重労働をしていました。それも低賃金でした。このような状況の中でも、その仕事ぶりを認めてもらうようになっていきます。しかし、カードにあった日本人排斥運動があったことや日常的にアジア人への差別の問題があるなど、日系移民は現地で生きていく上で苦しみや葛藤を抱えながら懸命に生きていました。このような当時の状況をあなたはどのように思いますか？」</p> <p><実際の生徒の回答></p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時のカナダは白人社会だから仕方がない。 ・明らかな人種差別だからおかしい。 ・過酷な環境の中でも懸命に頑張っていた日本人の存在を知って辛く悲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・数枚のカード(表に画像、裏面に歴史的事実)を活用し、それらを時系列で並べる活動を行うことで生徒の思考を促す。 ・日本人は低賃金・重労働であったなどの過酷な環境下であっても勤勉に働くことで次第に受け入れられていったことを捉えさせる。 ・現在の日系移民が日本人としてのアイデンティティを失わずに文化を継承していることを捉えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・日本人移民排斥運動などの移民の苦しみや葛藤について触れることで生徒に社会正義の実現の視点を芽生えさせる。 ・「仕方がない」という発言が出た時に、なぜそのように思うかを掘り下げたい。ただし、社会正義の実現の芽生えを目的としているので、「これは本当に仕方がないことかな」と問い返す程度とする。 	<p>カード①「工場で働く日本人女性」</p>  <p>カード②「日本人排斥運動」</p>  <p>カード③「工野庭園」</p>  <p>カード④「日系文化センター」</p>  <p>カード⑤「ムラカミハウス(造船所)」</p>  <p>カード⑥「かつての日系コミュニティ」</p> 
--	---	---	--

まとめ (10分)	3 本時と単元のまとめを行う T「日系移民に関する学習から、人々が世界各地へ移動する背景や自分自身のルーツを絶やさずに誇りをもって生きていることが分かりましたね。それでは、最後に学習課題の回答をそれぞれが論述しましょう。」	・人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性に気づかせる。	・ミライシード「オクリンクプラス」
<単元の学習課題>北アメリカ州に多く見られる移民は、地域にどのような影響を与えているのか。			
<実際の生徒の回答> ・北アメリカ州の国々は多くの移民で構成されており、あらゆる産業で移民が経済成長と深く関わっていることが分かった。 ・北アメリカ州に多く見られる移民が、それぞれの地域に持ち込んだ文化が地域において混ざり合うことで新しい文化へと成長した。 ・移民は労働者、アイデア、文化の多様性をもたらし、地域の成長に貢献している。一方で、社会的・政治的な緊張を引き起こす可能性もある。			

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法) ・北アメリカ州を支える移民の中に日系移民がいる歴史的事実を通し、人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性を理解している。(ミライシード オクリンクプラスの記述内容)
10. 学習方法および外部との連携 【学習方法】 本時:ゲストティーチャーへの質問を基に、より良い質問を練り上げる活動 カードを活用してどのような歴史的事実があったのかを読み取る活動 単元:1時においてグループごとに仮説を立て、情報収集を行い、関連する情報を読み取り、整理する一連の調査活動 【外部との連携】 本時:ゲストティーチャー(カナダの日系移民を研究している大学の先生) 単元:JICA 海外移住資料館およびカナダバンクーバー日系移民センター出典の資料
11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み ・埼玉県国際理解教育研究会および全国海外子女教育国際理解教育研究協議会での発表や情報発信 ・他の先生方(主に社会科教諭)に向けての指導案やワークシートの作成とデータ共有 ・本実践を論文形式にまとめ、懸賞論文として提出をする。また、学会にて発表を行う。

【自己評価】

12. 苦勞した点 学習活動において生徒の声を生かしてつなげることを意識して丁寧に行っていた結果、時間が押してしまった。最終的には、まとめの時間が急ぎ足になってしまった。次の時間の積み残しとして時間を取るようになってしまった。また、カードを作成して教師から出された問いに答えるグループ活動において生徒の思考を深める工夫を練っていたが、まだ生徒が活動する時間が必要に感じた。教師がやらせたいことを1時間に詰めた展開であったので、活動に無理が出てしまう学習になるという問題点が出てきたと考えている。
13. 改善点 ・思い切ってこの学習内容は2時間構成とすることも考えられる。1時間目はカナダに渡った日系移民の暮らしを丁寧に読み取る活動を中心にし、2時間目はその後の日系カナダ人としての暮らしにスポットをあてて授業展開し、後半は学習課題の回答をじっくり出すという構成の方が生徒に無理させないものであったのではないかと。 ・「日本人の移民」と「日系人」という言葉が授業の中で先生も生徒も混在する展開となってしまった反省点があった。別の言葉なので混同するべきではなかった。今回は世界の諸地域の中で初めて日本から移民がいたという事実にはスポットを当てたので、最初にそのような人たちがいたことをより丁寧にかつ「日本人の移民」と「日系2・3世」の定義などを触れる必要があった。その後のカードの読み取り作業の問いの中に、「日系人はまだいるのか？」を考えていたので、触れないようにしすぎてしまった。丁寧に分けて考えさせたい。
14. 成果が出た点 授業の流れの中でどうしても出させたいポイントは、生徒側からの発言で、押さえることができた。指導案を練り込んで作成した結果だと思っている。普段は、本時の展開についてはシンプル・コンパクトに指導案を作ろうと考えているので、今回の研修を通して、「予想される生徒の回答」「具体的な教師の問い」「本時の展開に資料を写真で盛り込む」などの新たな知見を得られた。

授業全体を通してゲストティーチャーの話やカードを活用した場面などメリハリがある活動になったことで、最後まで生徒がずっと集中して取り組むことができた。

カナダへの日本人移民を取り上げることによって、現在の多文化共生(受入側としての視点)について、また、自分事として考えることができるという工夫が生徒にも理解できる教材化に成功したと考えている。

15. 学びの軌跡(①生徒の反応から ②単元課題への回答の分析から)

①生徒の反応から

授業前から、いつもの教室にはいないゲストティーチャーやJICAの職員の方の存在、オンラインで公開されるということでも何台もタブレット端末があって中継されていることから、どんな授業が展開されるのだろうという期待感でいっぱいであった。

導入ではおせち料理の数の子に注目させることから始まったが、時期的にお正月が近いということで話題としてピッタリであった。その後、カナダのバンクーバーにある「日系漁師像」の問いから遠く離れたカナダに移住した日本からの移民の存在に大変驚いていた。そして、盛り上がりが最高潮に達したのがゲストティーチャーの登場であった。一斉に視線が向けられていたのが印象的であった。和歌山県三尾村がカナダのバンクーバーに移住していった人がいたという意外な事実の話に生徒は食い入るように説明に耳を傾けていた。

ゲストティーチャーが灯した火を消さない展開として教師はゲストティーチャーの話聞いて疑問に思ったことを問いとして考えてもらう発問を投げかけた。その結果、一人の生徒の「カナダにやってきた日本人をカナダ人はどのように思っていたのか」という問いに助けられ、スムーズに「当時の日系移民がどのような暮らしをしていたのか」という次の学習につなげることができた。次の展開であるカードを活用して生徒の思考を深める活動ではまだ時間が欲しかったという率直な思いを漏らした生徒がいる。この時間をいかにたっぷり取るかが、この授業の鍵となっただけに反省材料となった。

授業の終盤では、「日本人移民排斥運動」などの移民の苦しみや葛藤について触れることで生徒に社会正義の実現の視点を芽生えさせることを目標にしていた。その当時の日本人の心情を思う中で、大多数の白人社会に飛び込むことで差別や偏見を受けたことに「仕方がない」と回答した生徒も出たので、「本当に仕方がないことかな？」と切り返した際の多少困惑していた生徒の顔を出させたことで社会正義の実現の視点の芽生えがあったと考えている。まとめの時間の回答内容は②で扱う。



②単元課題への回答の分析から

ここでは生徒の記述内容から移民の視点を強く出した単元構成の授業を受ける中で、生徒にどのような変容があったかを分析していく。本単元や本時のねらいにつながる記述をした内容を取り上げる。生徒の背景や普段の様子を踏まえながらの分析内容であるので、教師の主観が入っていることは否めないが、お読みいただきたい。

・文化の多様化・料理・言語・音楽・習慣などが混ざって新しい文化が生まれる。また、移民の出身国との交流が増えて外交にも良い影響がある。多国籍企業が育ちやすい。

前時と本時で伝えたかった「文化のハイブリディティ」について言及している記述である。さらに、その内容に移民の出身国とのつながりや既習の多国籍企業のことも絡めて記述できていることを評価している。

・差別などの過酷なこともあったが、現地に様々な文化や技術を伝え続け、母国の歴史をつないだ。そして、移住先をさらに栄えさせた。移民はその国に大きな影響を与えていると思う。

本時のまとめとして教師が行った「人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性」について直接ではないものの触れている記述であることを評価している。「母国の歴史をつないだ」という記述は、本時の授業を受けなければ出てこない内容であると考えている。

・多文化社会をつくることに貢献したり、移民の人々によって新しい技術が発展したり、良い影響を与えていた。しかし、急すぎると現地の人々に混乱をもたらしてしまう悪い影響がある。

世界の諸地域の大単元をオセアニア州から始めた理由として、「多文化社会」を肯定的に創造できたオーストラリアの様子から学びを始めたいという思いがあった。さらにヨーロッパ州においてEUからイギリスが離脱した理由などを丁寧に学んでいった結果、北アメリカ州の学習も加えて花開いた記述となったと評価している。

・北アメリカ州は多くの移民が集まることで「たくさんの文化が混じり合い、新しい文化が生まれる」等のメリットがある一方で、「差別や対立が起きやすい」等のデメリットもある。それでもたくさん発展していて栄えている州になっていることから、移民は大きな影響を与えている。

前時では世界の諸地域のスタートで扱ったオセアニア州から本単元の北アメリカ州までの至る所で学んだ「移民」のメリットとデメリットを整理する時間をグループ活動として与えた。言葉としては教えてはいないが、「文化のハイブリティ」のメリットを捉えながらも差別などのデメリットがあることをまとめている。それでも移民が経済的に大きな影響を与える存在として活躍していることを記述できていることを評価している。

・オーストラリアの白豪主義の時のように現地にいた人が移民に対して職を取られてしまうのを恐れて差別的な法律ができてしまう。それは良くないことだが仕方がないとも思ってしまう。いきなり外から来た人に自分たちの国を奪われてしまうと思っての行動だと思う。

この記述を取り上げた理由は、本時のねらいを達成していることを評価しているというよりも「移民」がもつ多様性を生かす以前の「多文化共生社会」を創り出す難しさを端的に示しているからである。この状況を打破する可能性は社会正義の実現の視点を持たせることである。事実、このような授業を行っても移民のデメリットを強調する記述は出てくるので本当に難しいことである。中学校1年次では社会正義の実現の視点を芽生えさせるためにも本時の終末で行ったような自身の考えについて「本当に仕方がないことかな？」と問いかけ続けたい。

16. 授業者による自由記述

・社会科の授業の構成として、教科書では記述がないチャレンジングな内容であったが、移民について無理なく入れ込むことができたことで国際理解教育として汎用性が出るものとなったと参会者からお褒めの言葉があった。また、授業として良く構造化することができた。汎用性のある社会科としての実践になったと考えている。

・北アメリカ州の学習は教科書ではほぼアメリカ合衆国を取り上げているので、カナダよりもアメリカ合衆国の方が社会科の教材として、生徒にとっては分かり易かったのではという参会者の疑問があった。カナダの日系移民を取り上げた理由としては、北アメリカ州の単元をアメリカ合衆国だけでなくカナダ・メキシコ・キューバなど多様な国家を授業の中において取り上げたいという思いからであった。それでもアメリカ合衆国の巨大な産業の様子は学習内容として取り上げるべきなので、必然的に他の国は自然や文化などの視点での取り上げとなると考えた。また、アメリカ合衆国の移民は今までに社会科や総合的な学習の時間などで多く教材化されているが、カナダの日系移民についてはほぼ取り上げられていないという独自性から教材化したかったという思いもあった。

・今回の研修では他の教員も活用できそうな汎用性の高い授業実践事例を求めていると捉えていたので、自分自身の思いを全開に出す授業展開ではなく、従来の社会科教育の学習内容の文脈で捉えた時に無理のない範囲での「自分らしさ」を出すことを心掛けたつもりであった。一方で、逆にそれがもつたいなかったという意見もあった。

【参考資料】

- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会科編. 2017
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 社会科. 2021
- ・独立行政法人国際協力機構 横浜センター 海外移住資料館『海外移住資料館 学習活動の手引き<三訂版>』. 2024
- ・草原和博・大坂遊『学びの意味を追究した中学校地理の単元デザイン』明治図書. 2021
- ・吉水裕也『本当は地理が苦手な先生のための中学社会地理的分野の授業デザイン&実践モデル』明治図書. 2018